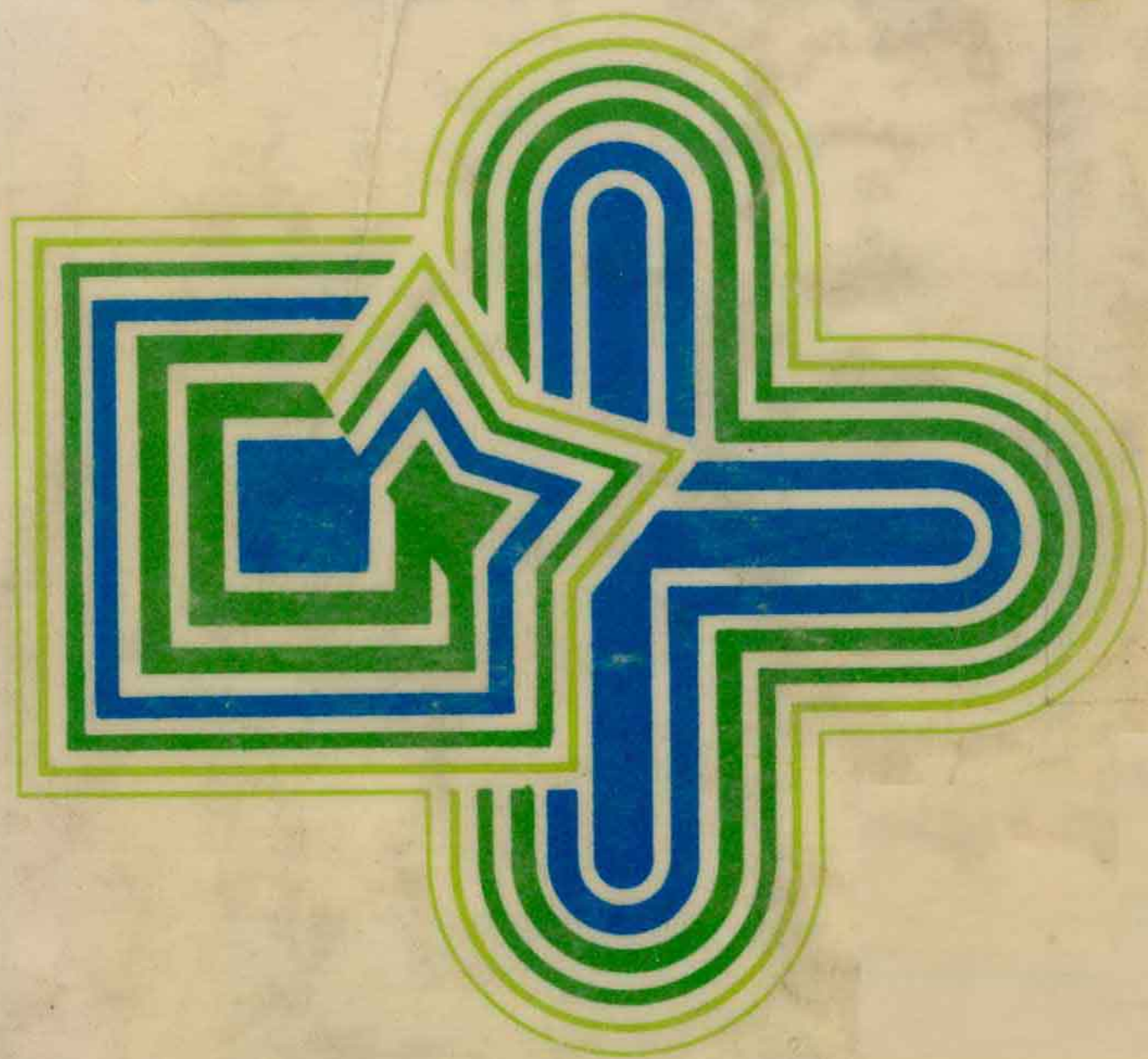


the big sleep — raymond chandler

大いなる眠り

レイモンド・チャンドラー

双葉十三郎訳



検 印
廃 止

訳者紹介 1910年10月9
日，東京に生る。1934年東
大経済学部卒。現住所，東
京都目黒区碑文谷6～9～
21映画評論家。

大いなる眠り

1959年8月14日 初版
1982年3月26日 38版

著 者 レイモンド・チャンドラー

訳 者 ふた ば じゅう さぶ ろう
双 葉 十 三 郎

発行所 (株)東京創元社

代表者 秋 山 孝 男

(162) 東京都新宿区新小川町1-16
電 話 03・268・8231 (代)
振 替 東 京 6 - 1565
工友会印刷所・本間製本

乱丁，落丁本は，ご面倒ですが小社までご送付く
ださい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Printed in Japan

大いなる眠り

レイモンド・チャンドラー

私立探偵フィリップ・マーロウは富豪スターンウッド將軍の邸宅へ招かれた。依頼の内容はゆすりの処理。將軍の次女カーメンが、賭博場でふり出した一千ドルの約束手形にからまる強迫状の件だった。マーロウは差出人のガイガーの家をさぐりに行った。ところが、突如として三発の銃声のとどろく。室内にとびこんだマーロウの前には二人の人間がいたが、それは猥褻な秘密写真撮影の現場だった。意表をつく新鮮な形容、会話の妙味、迫力ある描写、チャンドラーは処女作「大いなる眠り」によって、一流の批評家と読者を一挙に魅了し、ハメットにつづくハードボイルド派のチャンピオンとなった。翻訳権独占刊行！

登場人物

フィリップ・マールウ……………私立探偵

ガイ・スターンウッド……………百万長者の老將軍

ヴィヴィアン・リーガン夫人……………將軍の姉娘、ラスティ・リーガンの妻

カーメン・スターンウッド……………將軍の妹娘

ラスティ・リーガン……………ヴィヴィアンの三人目の夫、行方不明

ノリス……………スターンウッド家の執事

オウエン・テイラー……………同家の運転手

バーニー・オウルズ……………地方検事局捜査課長

タッグガード・ワイルド……………地方検事

クロンジャガー……………刑事部長

エディ・マース……………サイプリス・クラブ経営者

ジョー・プロディ……………將軍をゆする男

アーサー・グウィン・ガイガー……………狼本屋

アグネス・ロゼル……………ガイガーの女秘書、プロディの女

モナ……………エディ・マースの妻

大いなる眠り

レイモンド・チャンドラー

双葉十三郎 訳



創元推理文庫

THE BIG SLEEP

by

Raymond Chandler

Copyright 1939 in U. S. A.

by Raymond Chandler.

This book is publised in Japan

by TOKYO SOGEN SHA Co., Ltd,

by arrangement with Helga Greene Literary Agency
through Charles E. Tuttle Co., Tokyo.

大いなる眠り

十月の半ば、朝の十一時頃だった。日は射さず、強い雨が来るらしく丘がくつきりと見えた。私は、パウダー・ブルーの服に、濃紺のワイシャツ、ネクタイ、飾りハンカチ、黒いゴルフ靴、濃紺の刺繡^{ししゅう}いりの黒いウールの靴下をつけていた。ひげもそり、小ざっぱりして、くそまじめな顔つきだった。誰に知られようとかまうことはない。どこから見ても身だしなみのいい私立探偵のピカ一だ。なにしろ四百万ドルを訪問するのだ。

スターンウッド邸の玄関は二階建ての高さだった。インド象の一隊をこっそりいれられるくらいの入口の扉の向うには、ステンド・グラスがあった。何も着ていないがうまいぐあいに長い髪の毛を持った貴婦人が、木にしぼりつけられ、それを黒っぽい鎧^{よろい}を着た騎士が助けようとしている絵だ。騎士は礼儀正しくも兜^{かぶと}の面頬^{めんぼう}をどけ、貴婦人をしぼっている縄^{なわ}の結び目をいじっているが、どうも処置なしらしい。私はその場に立って、もし私がこの邸^{やしき}に住んでいたら、おそかれ早かれ登って行って騎士殿に助け舟をだしてやるだろう、と思った。まるつきり、縄をほどこうとしているように見えないのだ。

広間のうしろのほうはフレンチ・ドアで、その向うにはエメラルド色の芝生^{しばふ}と白い自動車車庫が見えた。車庫の前で、黒いぴかぴかの長靴をはいた浅黒いやせた若い運転手が、栗色のパッカードのコンヴァーティブルを掃除^{そうじ}していた。車庫の向うはむく、犬^{いぬ}みたいにていねいに手入れをし

た立木だった。そのまた向うには丸屋根のついた大きな温室があった。それからまた立木があり、そのすべての向うに、どっしりと気持よさそうに腰をすえた丘が見えた。

玄関広間の東側にはタイルを張った階段が鍛鉄たんてつの欄干らんかんをつけた画廊へ通じ、そこにまたステンド・グラスの恋物語があった。すわる部分にまるい赤いビロードを張っただけの固い椅子が壁の周囲に沿ってずらりと並んでいた。誰もすわったためしがないみたいだった。西側の壁の中央に、ちようつがいしんちゆうがいを四個つけた真鍮しんちゆうの火よけをはめた、大きなからっぽの暖炉があり、その上はキューピッドを両端につけた大理石の棚だった。棚の上のほうには大きな油絵の肖像があり、またその上に弾丸で破れたのか虫が食ったのかわからないが、とにかくぼろぼろになった二枚の騎兵隊の旗が、ガラスの額の中にぶちがいにおさまっていた。肖像はメキシコ戦争時代の盛装をしてしゃちほこしゃちほこばった士官だった。黒い小ぎれいなあごひげと口ひげをつけ、石炭みたいに黒い、熱したきつい目を持っていた。つき合いくいつら構えた。私はスターンウッド將軍の祖父だと思っていた。將軍自身ではあるまい。彼はちかごろ、まだ悩ましき二十歳台の娘を二人もかかえているにほぼけすぎた、といううわさだ。

なおも、熱した黒い目をみつめているところへ、階段の下、ずっと向うにある扉があいた。執事がもどって来たのではなかった。若い女だった。

彼女は二十歳かそこいらだった。小柄できゃしゃだが、しんは強そうだ。淡青色のスラックスをはいていた。水面を流れるみたいな歩き方だった。美しい黄褐色の髪は、先端を内側へまき込むいま流行の侍童型にはできないほど、短く切ってあった。目は濃い灰色で、私を見てもほとん

ど表情が浮かばなかった。近づいてくると、彼女は口もとだけで微笑した。小さな鋭い犬歯が見えた。新鮮なオレンジの髓みたいに白く、陶器みたいに光っていた。その歯は薄くてたるみのなさすぎる唇の間からきらめいた。顔には血の気がなく、あまり健康そうには見えなかった。

「背が高いのね」と、彼女は言った。

「僕のせいじゃない」

彼女の目が丸くなった。困ったらしい。考えているのだ。顔を合わせてまだ僅かな時間しかたっていないが、私にはわかった。彼女にとって、考えることは結局いつも困ることなのだ。

「好男子ね」彼女は言った。「自分でもわかってるんでしょ」

私は返事を口ごもった。

「お名前は？」

「ライリー」私は言った。「ダグハウス・ライリー」

「おかしな名前ね」彼女は唇をかみ、首をちよいとかしげて、ながし目で私を見た。それから、長いまつげを、頬に触れるくらい伏せ、舞台の幕みたいに、またゆっくりとあげた。この芸当は百も承知だ。私にでんと尻もちをつかせ、亀の子^{かめこ}みたいに空中に手足をつっぱらせようということなんだ。

「あなた、拳闘家？」私がひっくりかえらなかったのも、彼女はきいた。

「凶星じゃないが、探偵だ」

「探……」彼女は怒ったみたいに頭をふった。豊かな髪の色が、広間の薄暗さの中で輝いた。

「からかつてるの？」

「うふう」

「なんて言ったの？」

「あっちへ行きたまえと言ったんだ。きこえたらう」

「なんにも言わないくせに。あなた、ただのはったり屋ね」

彼女は親指をもちあげてかんだ。奇妙なかつこの親指だ。平たく、細く、第一関節にまるつきり曲線がなく、おまけの指みたいだった。彼女はそれを、おしゃぶりを持った赤ん坊みたいに口の中でぐるぐるまわしながら、ゆっくりとかみ、ゆっくりとしゃぶった。

「とても背が高いのね」彼女はそう言うと、げらげら笑った。そして、足をあげないままで、ゆっくりとしなやかにからだをまわした。両腕はだらりと両脇にたれた。爪先で立って、私のほうにもたれかかってきた。彼女のまっすぐな肉体はうしろ向きのまま私の腕にたおれこんだ。抱きとめなければ、モザイクの床で頭をぶち割ってしまうところだ。私は彼女の腋わきの下に手をいれてつかまえた。とたんに彼女の足はくにくにくになつた。立たせておくにはしっかり抱いていなければならなかった。頭が私の胸へつくと、彼女は顔を私のほうへねじむけて、げらげら笑った。「あなたすてきよ。あたしもすてきなよ」そう言って、またげらげら笑った。

私は何も言わなかった。このちょうどいい瞬間をつかまえ、執事がフレンチ・ドアから帰って来て、私が彼女を抱いているのを見た。

彼はいっこうに困ったような顔つきをしなかった。背の高い、やせた、白髪しらがの多い男だ。六十

歳か、その近くだろう。青い、およそ空漠たる目だった。皮膚はなめらかでつやがよく、とても強靱な筋肉を持った男のように動作した。彼が広間を横ぎって私たちのほうへ歩いて来ると、彼女はぱっと私から飛び離れ、部屋をかけぬけると、鹿みたいに階段を上って行った。私がないため息を吐き出す前に、姿は消えていた。

執事が無表情に言った。

「マールロウ様。閣下はすぐお会いになりますそうで」

私は顎をしゃくってきいた。

「誰だい？」

「カーメン・スターンウッド嬢で」

「もうお乳からはなしたほうがいいね。いいかげん大きくなってるようじゃないか」

執事は重々しい丁重さで私をみつめ、同じことばをくりかえした。

2

私たちはフレンチ・ドアをぬけ、赤レンガを敷いたなめらかな小径を、車庫のところから芝生の向うへまわって行った。少年みたいな顔の運転手が、こんどは大きな黒いクローム張りのセダンをみがいていた。小径は温室の横手へ出た。執事は扉をあけ、身をひいた。一種の控室で、火まわりのよくない天火みたいになま暖かった。執事は私に続いてはいると、扉をしめ、内側の

扉をあけた。私たちははいった。今度はまったく熱^{あつ}かった。空気はよどみ、びしょびしょに水蒸気を含み、おまけに満開の熱帯蘭^{らん}のむせるようなにおいがたちこめていた。ガラスの壁と屋根はすっかり曇り、大きな水滴が植物の上にぽたぽた落ちていた。照明は現実ばなれした緑色で、水族館の水槽を通過した光線みたいだ。そこらじゅう植物だらけ、一群は、ぼってりしたきたない葉を洗ったばかりの死骸の指みたいにひろげていた。毛布の下で沸騰^{ふっとう}しているアルコールみたいにつよいにおいだった。

執事は、びしょびしょな葉が私の顔にぶつからないように、最大の努力をつくして道をひらき、やつとこさジャングルのまっただなかの空地へ出た。まる屋根の下だった。六角形に敷石が敷いてあった。古ぼけた赤いトルコじゅうたんがあり、じゅうたんの上には椅子車がおかれ、椅子車には老いぼれて明らかに死にかかっている男が一人、腰かけていた。はいっていく私たちをみつめる黒い目からは、とつくの昔あらゆる火が消えてしまっていたが、広間の炉棚の上にかかった肖像と同じ石炭みたいに黒い率直さは、まだ残^こされていた。この目以外、彼の顔は鉛^{かみん}の仮面^{かめん}だった。血の気のない唇、とがった鼻、くぼんだ顴^{こめかみ}。外側へ曲がった耳たぶは聴覚を失う前徴だ。ひよろ長くやせた肉体は、この熱さにもかかわらず、旅行用毛布と色あせた赤い湯上りタオルで包まれていた。ひからびて骨ばかりみたいな手はだらしなく毛布の上におかれていた。爪は紫色だった。かさかさの白い髪の毛がすこし頭髮にぶらさがっていた。裸岩の上で生命を保持しようとしたかっている野性の花みたいだった。

執事は彼の前に立って言った。

「閣下、マールロウ様でございます」

老人は動きもしゃべりもせず、うなずこうとさえしなかった。ただ、ぼんやりと私を見ただけだった。執事はべとべとした柳細工の椅子を私の足のうしろから押しつけた。私はすわった。彼は器用な手つきで私の帽子をさらった。

やっと、老人は、井戸の中から声をひきずり出して言った。

「ブランディだ、ノリス。ブランディはいかがかな？」

「何でも結構です」私は言った。

執事は胸くその悪い植物を押しわけて出て行った。將軍は、失業中のレビュー・ガールがとっておきの最後の靴下をはくときみたいに、注意ぶかく体力を使いながら、ふたたびゆっくりと口をひらいた。

「わたしはいつもシャンパンでしたわい。フォージュ谷のように冷たくしてな。その下に三分の一ほどブランディを入れますのじゃ。上着を脱がれてもかまいませんぞ。血の気のある普通の方には、暑すぎるからの」

私は立ちあがって上着をひっぺがし、ハンカチを出して、顔と首と手の甲をふいた。八月のセント・ルイスだってこんなことはない。ふたたびすわると、私は本能的に煙草をさぐったが、やめた。老人は私の動作に気づいて、かすかに微笑した。

「すつてもかまわんですぞ。煙草のにおいはいいいものじゃ」

私は火をつけ、肺一杯の煙を彼にかけた。彼は、鼠ねずみの穴をかぐテリヤみたいに、その煙をかい

だ。かすかな微笑が、影を宿した唇の両端に浮かんだ。

「代人を使って悪徳を味わうようになってはおしまいですわい」彼は感情もこめずに言った。「君の前にいるこのわしは、はでな人生の退屈千万な残骸ですわい。両足と腹半分から下が不随でな。物もほんのすこししか食えんし、眠るのもほとんど起きているのと同じこと。君たちからみれば眠りとは言えんじやろう。生きているのは熱度のおかげ、生れたての蜘蛛くものようなぐあいですわい。蘭は熱度を保つための口実ですじゃ。蘭はお好きかな？」

「特にというほどじゃありませんが」私はこたえた。將軍は半ば目を閉じた。

「いやらしいものじゃ。膚ざわりは人間そのままでな。淫売婦のようにいやな甘いにおいをさせておる」

私はぼかんと口をあけたまま彼をみつめた。じんわりと湿った暑さは、私たちを包む棺衣みただった。老人はうなずいた。首が頭の重さを恐れているみたいだった。そのとき、執事がジャングルを押しわけて車つきの茶台といっしょに帰って来て、私にブランディとソーダをまぜてくれた。ぬれたナプキンで氷入れのバケツを包むと、彼はまた静かに蘭の中へ立ち去った。ジャングルの向うで扉が開き、しまる音がした。

私は飲物をすすった。老人は私を見ながら、何度も舌なめずりをした。葬儀屋が空気乾燥器で手をかわかすみたい、片方の唇をゆっくりと片方の唇にひきつけるのだ。

「君のことを話してください。マローウ君。わしにはきく権利があると思いますかな」

「もちろんです。が、話すことはすこししかありません。年齢は三十三歳。カレッツジに通って

たことがあり、必要とあれば今でも英語はしゃべれます。仕事のほうはたいしたこともなく、地方検事のワイルド氏の捜査課に雇われたことがあるていどです。そのときの課長だったバーニー・オウルズという男が、あなたが私に会いたがっていると連絡してくれたわけです。結婚はしていません。理由は、巡査の女房にロクな奴はいないから」

「それに、いささか天邪鬼あまのじやくな性質じゃろう」老人は微笑して言った。「ワイルドのところで働くのはいやじゃったのかな？」

「クビになったんです。命令に服従しなかったという理由でね。服従しないのは十八番の芸当です」

「わしもそうじゃった。うれしいことをきかせてくれたの。ところで、わしの家族についてはどんなことを知っておるかな」

「あなたには奥様がなく、お嬢さんが二人おいでだが、お二人とも美しくて、向う見ずだとうかがっています。お一人は三度結婚なさり、三度目は、むかし酒の密輸売買をしていた人物で、仲間には、ラスティ・リーガンという名前で知られた男。とまあ、これが知っている全部ですが」

「今の話の中で、奇妙な気がしたことはないかな？」

「あるとすれば、ラスティ・リーガンの件でしょう。が、私も閨酒稼業かきようとは仲良しだったんでね」老人は儉約した弱い微笑をうかべた。

「わしもそうじゃった。わしもラスティが好きでな。クロンメルから来た髪のちぢれた大きなアイルランド人じゃった。さびしそうな目つきで、ウイルシャーブールヴァード大通りみたいにひろびろとした

笑い方をする男じゃった。わしが初めてあの男に会ったときの感じは、たぶん君が想像しているあの男の感じじゃと思う。ひよんなことでおかいこぐるみになった冒険家といったところじゃ」「たしかにあなたは彼がお好きだったらしい」私は言った。「連中の俗語をごぞんじですからね」彼は血の氣のないやせた両手を毛布の下へ突っこんだ。私は煙草の吸殻すいがらをすて、飲物を飲みほした。

「あの男はわしの生命の息吹いきぶきじゃった。ここにいる間はな。わしといっしよに幾時間も過ごし、豚のように汗をかきながら、ブランディをがぶ飲みしよった。アイルランド革命のいろいろな話もしてくれた。アイルランド共和国の士官だったのだな。この合衆国では市民権など持っておらんかったろう。娘との結婚もおかしなものじゃった。結局、ひと月とは続かなかったよ。いいかなマールウ君。わしは家庭の秘密をお話ししておるのじゃ」

「その件は今でも秘密です」私はこたえた。「彼はどうしました？」

老人は無表情に私をながめた。

「ひと月ほど前、行ってしまいおった。誰にも何も言わず、突然にじゃ。このわしにも別れの言葉ひとつ残さずにな。わしもすこし氣を悪くしたが、なにせ荒い育ちの男じゃ。そのうちにたよりをよこすじやろう。ところで、わしはまたゆすられておるのじゃが」

「また？」

彼は毛布の下から手を出した。茶色の封筒を持っていた。

「ラスティがいる間に、わしをゆすろうとする奴がいたら、わしはその男を氣の毒に思わねばな